幼児期の道徳性の芽生えの理解および指導法の学習教材の開発
～幼児の生きる力を育む保育者の力量形成に向けて～

岩立京子（幼児教育科）、本蔵達矢（大学院連合学校教育学研究科博士課程）、
神山雅美、山澤京子、八木亜弥子（東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎）

１　問題と目的

社会道徳システムは、子どもが生まれる前から外界に存在しているが、次第にそれらが、子ども自身によって意味づけられ、学びが成立し、子ども自身の行動を内側から制御するシステムとなっていく。この過程を「内化（internalization）」という（Kochanska & Thompson,1997、岩立、2007）。この内化を導くことなく、外側からの押し付けや監視によって行動を強制されると、子どもの道徳的自己は形成されにくくなる。子育てや教育は、この社会道徳的な価値やルールの「内化」を導くことに、その難しさがあり、次世代育成にかかわる親や教員にとっての最も重要な課題となっている。

一方、わが国の教育の目的は、教育基本法にも明記されているように、人格の完成を目指し、幅広い知識や教養、豊かな情操や道徳心、健やかな身体を養うことであるが、幼児期の教育は、人格形成の基礎を培うものとして、近年、益々重視されてきており、それを担う力量の高い教員の養成、研修は、喫緊の課題となっている。

本研究では、学生が①近年の乳幼児の発達と乳幼児を取り巻く環境、②乳幼児期から児童期にかけての道徳性の発達、③幼児教育の不易の課題と今日的課題の学びを踏まえて、T.リコーナ（2005）が示す価値を参考に、④「正義」（すべての人の権利を尊重する等）、「愛」（思いやり、優しさ、寛容等）、「誠実」（良心に忠実で、約束を守る等）（村田、2007）に関する例話に対して、自らの経験を投影し、議論し、幼児、保護者、自分自身についての理解を深めることを目的としたねらい、内容、学習教材からなる教育プログラムを作成することを目的とした。

２　方法

＜日時＞

第１研究　平成 23 年 1 月 17 日、24 日、2 月 7 日、各回とも 12:50～14:20

第２研究　平成 23 年 12 月 19 日、26 日、平成 24 年 1 月 16 日、23 日、各回とも 12:50～14:20

＜協力者＞　教員養成系大学の 3 年生、「幼児教育心理学」の授業の受講者 27 名。

＜教材の作成＞

第１研究　既存の DVD 教材のなかから、「正義」「愛」「誠実」等の価値を学びうるトラブルのシーンを３つ抽出した。幼児のトラブルの①因果関係、②教員としてのかかわりのねらい、内容、③保護者の立場からみたときの感情や認識、かかわりについて問うワークシートを作成した。

第２研究　既存の例話を用いるのではなく、学生自身が保護者用の教材を作成した。保護者用に短い例話と４コマ漫画からなる教材を、まずは個人で作成し、それを用いて自らの親やその他の大人に試行し、最後にグループごとの話し合いを通して作成した。

＜手続き＞

第１研究　学生の幼児や親の理解を深めるとともに、具体的な対応を考えることを目的として、①講義（子どもを取り巻く環境と子どもの発達、子どもの社会化と道徳性の発達、幼児期の道徳

性の芽生えに影響する要因、幼児期の道徳性の芽生えを促す諸要因）を行った。次に、教材作成の意義について述べた後に、②幼児のトラブル場面の DVD を視聴し、ワークシートにトラブルの因果関係、当該幼児の行為、意図や動機、教師としてどのように対処するか、教師として、また、親としてはどのように考え、感じ、対処するかなどを書いてもらった。

第 2 研究　子どもの道徳性の発達および親の問題、子どもの社会化過程における重要なエージェントである親の役割について講義後、保護者用のプログラムの意義や実際についての講義後、「規則の遵守」と「子どもの自己実現」の価値の葛藤を含む例話について学生自身が考え、グループで議論した。その経験をもとに、各学生が保護者が考えやすい例話を作り、その内容を象徴するような 4 コマ漫画を添付する教材を作成した。その教材を用いて、学生が学生自身の親、その他の大人に試行した。各学生の学びを共有するために、例話を持ちより、グループ内で発表し、討議し、グループで一つ例話を作成した。クラスで学びを共有するために、グループごとの例話を発表し、討議した。これら一連の作業の過程で、学生がどのような変容をしたかを記録した。

３　結果と考察

第 1 研究では、DVD 教材から既存の事例を抽出して、自分自身、教員、親の立場から、トラブルの把握、因果関係、対応について考えてもらい、ワークシートに記入してもらった。

結果は、例話によって異なっており、3 つの事例中、２つで攻撃をする子どもに焦点をあてた記述が多かった。しかし、一つの DVD では、攻撃される子どもに焦点があてられており、ステレオタイプに攻撃をする子どもに焦点をあてるわけではなく、ナレーションや映像の編集者の強調によるバイアスが判断に影響される可能性が示唆された。また、因果関係の認識についての記述を、カテゴリー化したところ、①遊びの延長、楽しさ、②攻撃する子どもの共感性や役割取得の未熟さ、③保育者の指導や環境構成、④攻撃される子どもの情動表出の未熟さ、⑤その他（強弱などの関係性や、特定の子どもの攻撃性の高さなどの個人差）に分けられ、多面的に捉えられていることが示唆された。多くの学生は、この事例をリコーナの言う「正義」と「愛」の価値の葛藤として捉え、それらが未熟な子どもを多面的に理解する視点をもっていることが示唆された。

指導法については、我が国の学校教育では一般にインカルケーションの手法が用いられるが、幼児教育では、社会的構成主義の考え方のもと、幼児を意味生成の主体として尊重し、体験を通して、出来事の意味を幼児なりに考えていくインカルケーションを目指している。しかし、実際は、幼児を未熟なモラリストとして捉え、インドクトリネーションが行われていることが多い。教員養成課程でこれまで道徳について学んできた学生の指導法の記述を分類したところ、①行動の制止、②状況確認の問い、③行為とその結果の伝達、④感情の確認、共感と他児への伝達、⑤理由づけ、⑥解決への助言・指示に分けられ、⑥解決への助言・指示、④感情の確認、共感と他児への伝達というインカルケーションのアプローチの比率が高かった。親の立場での記述は、わが子を絶対視し、攻撃する他児や保育者に対するネガティブな記述が多かった。

第 2 研究は、親プログラムを学生が作成する過程での学生の学びを捉えた。人格教育において、親や地域社会が子どもの人格発達にとって如何に重要であるかを親に伝え、人格教育のパートナーとして親にも参画してもらうことが今後、益々、重要になる（リコーナ、2007）。本研究の結果は、学生が今回のプログラムを通して、子ども理解、親理解、自己理解を深め、多面的な対応を考えるきっかけとなることが示唆された。本研究で提案するような親教育の視点を組み込んだ幼児教育を学ぶ道徳教育のプログラムは、今後の教員養成において益々重要になると思われる。